

# 大川をいつか映画に

## これから

— 大震災を生きる

139

北上川が流れ、背後に山が広がる。自然豊かで大好きな古里。いつの日か、自分の手で映像に収めたい。そう胸に抱いてきた。

石巻市の石巻高3年佐藤そのみさん(18)は1日、卒業式を迎える。4月から関東の大学で映画製作を学ぶ。生まれ育った大川地区を舞台にした映画への夢は、大川小6年のころから温めていた。

中学2年の時、東日本大震災で大川地区も津波に襲われた。自宅は無事だったが、母校では児童と教職員84人が犠牲になった。その中に6年生だった妹みずほさん(当時12)もいた。すぐには受け入れられなかった。

毎晩のように、自宅に保

護者が集まってきた。学校でわが子が命を落としたことに疑問を持っていた。自分は今近くの公民館に通い、ボランティアに勉強を教わった。

1年ほど前。「大川小が壊されるかもしれない」と聞かされた。「子どもが犠牲になった校舎を見るのはつらい」と思う保護者が多いと知った。「自分も何かしなくては」。ボランティアの学習支援の会に再び顔を出すようになり、後輩たちと語り合った。

昨年、仙台と東京であったシンポジウムで訴えた。「校舎を残してほしい」。人前に出るのは怖かった。でも、震災を風化させたくない。大切な場所を失いた

くもなかった。「大川小は私の原点。校舎にはつらい記憶だけではない」と思い出が詰まっている。

く、助かった子や卒業生、犠牲になった74人の子の夢

あの場所に行くたびに『今を大事に生きなさい』と奮い立たせてくれる」

### 第22部 私の一步 ①

石巻市 佐藤そのみさん (18)



小さいころから大好きだった長面浦で写真を撮る佐藤さん。震災前から大川地区の風景をカメラに収めている

震災でいったんは諦めかけた夢にも再び向き合う。大川小の校舎は、欠かせない光景の一つだ。ただ、校舎の保存について話し合う中で自分たちの考えを通すだけでなく「意見が違ふ人の話も聞く必要がある」とも学んだ。

何を、どう描くか。まだまだとまっているが「ドキュメンタリーではなく、物語を撮りたい」と思う。誰にも先を越されたくない。そのためにもっと多くを学び、成長しないといけない映画は撮れない」。夢に向かって果立つ日は近い。

春、多くの人が新たなスタートを切る季節がまた巡ってきた。震災から間もなく4年。さまざまな思いを胸に、一人一人が決意の一步を刻む。

— 第22部は6回続き